

## 私の声と君の歌

八代市立千丁中学校 2年 木下 可奈子

私は、民謡を習っています。いつも、八代おざや節を歌ったり、太鼓の練習をしたりしています。歌うと、体力を使うので、かなり疲れますが、とても気持ちが良いです。

私が歌をこんなに好きになれたのは、2年前に出会った女の子のおかげでした。その女の子は、歌が上手で、明るくて民謡スクールのメンバー皆と仲良しでした。お祭りやイベントの時も一生懸命で、私はとても憧れていました。その子と一緒に歌った時は、心の中が達成感でいっぱいになりました。でも、私は、自分の声にコンプレックスを持っていて歌を心から好きにはなれませんでした。私の声は、小さくて、低音も難しくて歌に向いているとは言えない声でした。だから、私はその女の子に相談しました。「私の声って、変だよ。マイクがないと声をだすのが大変だし、きれいな声じゃないからさ。」私がそう言うと、女の子は「そんなことはないよ。私、その声とても好きだよ。だって、すごく一生懸命なのが伝わってくるもん。それに、私だって完ぺきなワケじゃないからさ。互いの苦手な所とか、バランスをみて、助け合いながら歌おうよ。」と励ましてくれました。

その日を境に、私たちは2人で民謡の歌を、心から楽しんで歌うようになりました。八代おざや節は、私がオハヤシで、あの子が歌。クルメのそろばん踊りは、私がソロで、あの子が支え…。私は、もう2人でいれば何もこわくないような気がしていました。あの子と歌っている時が、楽しくて楽しくてたまりませんでした。でも、あの子は、私よりも先に、民謡スクールを卒業してしまいました。高校生になったあの子は、民謡スクールを卒業するしかなかったのです。私は、その話を聞いたとたん、不安になりました。今まで2人で助け合ってきたのに、これからは、私1人でがんばるしかないのだ…。不安でいっぱいになった私はあの子にたずねました。

「これから、私1人で大丈夫かな…。」すると、女の子は私の目をじっと見て言いました。「たしかに今までは私と2人で助け合ってきたよね。お互いの長所を生かして楽しく歌ったり、一緒になやんだり。でもこれからは、それぞれちがう場所で活やくしていくの。どこかの誰かと助け合って、励まし合って、くだらない事言いながら笑うの。そして、お祭りやイベントがあったら、新しい友だちをたくさん連れてきて、君の歌声を聴きに会いに来る。私、その声好きだからさ。」そう言われると、自然と自信がわいてきました。

あの子のおかげで、私は今、堂々とステージの上で歌を歌えています。小さかった声も、前より大きくなりました。苦手だった低音も出せるようになりました。もう一人でもこわくない。私は今日も、あの子が好きだと言ってくれたこの声で、歌を歌っています。